

## ◆小児用肺炎球菌ワクチン（不活化ワクチン）の説明

### ◇肺炎球菌とは

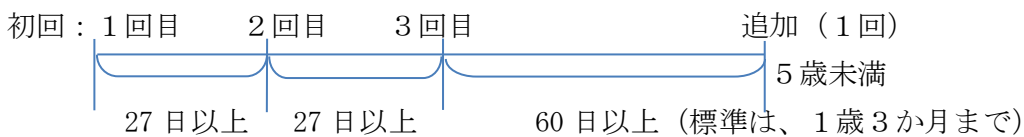
肺炎球菌は、子どもの感染症の二大原因のひとつです。この菌は、元気な子どもの鼻やのどにいてごく身近な菌で、小さな子供は誰でもかかる可能性があります。特に赤ちゃんのうちは、細菌に対する抵抗力がないため、細菌性髄膜炎など症状の重い病気をおこしたりします。

肺炎球菌にかかりやすいのは生後3ヶ月以降から5歳くらいまでで、患者数は、細菌性髄膜炎が5歳未満の小児10万人当たり年間200人くらいです。ほかにも、菌血症、肺炎、中耳炎などを起こします。

◇肺炎球菌ワクチン（沈降13価肺炎球菌結合型ワクチン）1回0.5mlを皮下注射。

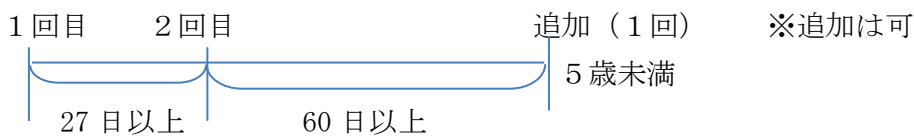
### ◇小児用肺炎球菌ワクチン接種スケジュール

①標準的パターン：生後2ヶ月齢～7ヶ月齢未満の場合（初回免疫3回と追加免疫1回。合計4回）



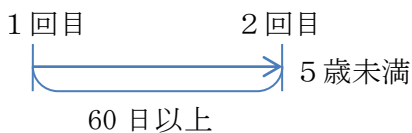
※2回目が、1歳を超えた場合、3回目は行わない。追加接種は可。

②接種開始年齢が生後7ヶ月齢～12ヶ月齢の場合（初回免疫2回と追加免疫1回。合計3回）



※2回目が、2歳を超えたら行わない。追加接種は可。

③接種開始年齢が1～2歳未満の場合（追加免疫1回と追加免疫1回。合計2回）



④2～5歳未満（1回接種で終了。）

### ◇効果と副反応

<効果>肺炎球菌ワクチンは、2000年にアメリカで定期接種を始めてから重い感染症の発症率が激減したとの報告がされています。また、子どもたちが接種したことにより、高齢者もこの菌による重い病気の発症率がさがったという報告もあります。

<副反応>局所反応（赤くなる、硬くなる、腫れ）、発熱・嘔吐や食欲不振等起こる頻度は、他のワクチンと同程度です。



ヒブワクチンと小児用肺炎球菌ワクチンを同時に接種する場合や、ヒブワクチンまたは小児用肺炎球菌ワクチンと他のワクチンを同時に接種する場合には、その必要性を医師が判断し、保護者の同意を得て接種します。

